

2022～23年度 SDGs未来プロジェクト

—学園・大学のビジョンを具体化する教育の試行—活動報告

市 川 洋 子 (敬愛大学教育学部教授)

飯 野 由美子 (敬愛大学経済学部教授)

庄 司 真理子 (敬愛大学国際学部教授)

はじめに 共同研究の主旨

2022年度、2023年度の報告をまとめてここで記す。なお、2022年度はコロナ禍ということもあり、活発な活動を実施することはできなかった。2022年2月28日に、ユネスコ(国連教育科学文化機関)元事務局長の松浦晃一郎氏にご講演を依頼したが、コロナ禍ということもあり、ZOOMでのご講演となった。2022年度に入り、2023年2月8日に松浦氏を本学にお招きし、第1回敬愛 SDGs集会を実施した。

2021年度に引き続き本プロジェクトを継続し、さらに発展させる。2021年度の活動は、すでに本学の SDGsサイトに貢献し、総合地域研究所および各学部の紀要でもその成果を発表しているが、学外からは教育学術新聞にその活動の一部が紹介され、さらに千葉県 SDGsパートナーシップ制度の本学における中核として本プロジェクトが活動している。2023年度は、敬愛 SDGs集会に力を入れ、千葉敬愛短期大学、敬愛学園高校と本学が協働してイベントを開催した。本プロジェクトのメインイベントである敬愛 SDGs集会は、学園全体の連携を目指している。

我々の学園では、2020年度から持続可能な開発目標(SDGs)を基本方針に加えた。しかし、高いところに優れた学園の方針・大学の方針が存在しても、それを現場の教員がどう SDGsと結びつけて具体的な教育に落とし込んでいくかについては、方向やしくみがまだ定まっていない。SDGs教育を学園で定着させていく際には、まずは教育学部を有し教育開発研究力を有した大学で、安定して SDGs教育を実践するベースを作っておく必要があった。

そこで、本研究の目的を、大学生にとって実践可能で効果的な SDGs教育のプロトタイプを作ることに置いた。それを、3学部から教員が1人ずつ担当し、それぞれの学部の特性やシナジー効果を勘案し磨き上げるべき学生の資質・能力を見定めた上で、現実実践可能な教育方法を工夫し、共同研究を通じて試行錯誤を行うこととしたのである。

大学レベルでのプロトタイプを作った先には、それを学園全体に移植する地平が拓ける。大学生に有効な SDGs教育が、千葉敬愛短期大学および系列高校でも同様に有効であるか、実証実験を行う。また、系列高校の高校生が参加する時には、それをアレンジを加えることによって高校生に適合したプログラムに変える方向性も検討する。

さらにやり方を工夫して高大連携を利用し大学生・短大生と高校生が共同でグループワークを行ったり、将来的には学園を超えて市民と協働する方向性も検討する。

教育方法を開発するベースの作業を行う各学部の教員としては、それぞれの研究立場から SDGsに別の視野から関心を持ってきた国際学部：庄司真理子(座長)、教育学部：市川洋子、経済学部：飯野由美子が担当することとした。その他に、SDGsと Society5.0との関係に詳しい三幣真理も加わる。また2022・23年度の敬愛 SDGs集会では、大学運営室、IR・広報室、地域連携センター、メディアセンターにもおおいにお世話になった。教職員が一丸となって取り組んだ成果ともいえる。2024年度は、この連携をしっかりとした組織とすべくプロジェクトを進めていきたい。

なお、SDGsを学生たちに教えるために、教員側は SDGsに関する研究調査をする必要がある。そのための活動として、スウェーデンでの研究調査、国連グローバル・コンパクトに関わる国内出張、3名の講師へのインタビューを行った。

本プロジェクトの活動内容として、敬愛 SDGs集会、講演会、プロジェクトメンバーによる国内外への研究調査、インタビュー、教育活動などがある。ここではそれらの活動内容を紹介する。

I 敬愛 SDGs集会

敬愛 SDGs集会は、第1回目が2023年2月8日に敬愛学園高校と本学経済学部、国際学部、教育学部の四者の合同で開催された。第2回目は、2023年12月16日に千葉敬愛短期大学も加えて、敬愛学園高校と本学の三学部が合同で開催することとなった。この2回の敬愛 SDGs集会は、前半が講演会やシンポジウムなど、講師をお招きしてお話を伺い、後半はポスターセッションとして高校生、短大生、大学生の発表を相互に行い相互に聴くという二部構成で実施した。以下、第1回目と第2回目の敬愛 SDGs集会の記録である。

1. 第1回 敬愛 SDGs集会講演会の部

文責：庄司真理子

・第1回敬愛 SDGs集会は、これを記念して、2023年2月8日に、国連教育科学文化機関(ユネスコ) 元事務局長 松浦晃一郎氏に本学にお越しいただき、「ユネスコの持続可能な開発教育(ESD)と持続可能な開発目標(SDGs)」と題するご講演をいただいた。ご講演の記録は、第1回敬愛 SDGs集会の記念すべきご講演として、本誌『総合地域研究所保』第14号に本報告書とは別に独立の講演会の記録として記した。コロナ禍ではあったが来場者も多く、有意義な会となった。

2. 第1回 敬愛 SDGs集会 ポスターセッションの部

文責：市川洋子

ポスターセッションとは、発表者が現在取り組んでいるテーマを1枚のポスターにまとめて発表することである。参加者は興味をもったスペースに集まり、発表者は参加者が集まったら発表する。ポスターセッションは発表者と参加者の距離が近いと、質疑応答がしやすく、活発なディスカッションができる。

敬愛 SDGs集会では、敬愛学園系列校の生徒・短大生・学生・教職員が一堂に会してSDGsをテーマとしてディスカッションを行い、SDGsの学びを深め合っていく場である。そこで、集会の第2部として、ポスターセッションを実施することとした。授業やゼミ等において SDGsに関する問題に取り組んだ発表者が、学びの成果を持ち寄り、以下の要領でポスターセッションを実施した。また、その成果を【振り返り】にまとめた。

【参加チーム】

敬愛学園高等学校／2年生5チーム(いずれも単独発表)
敬愛大学／経済学部 ポスター参加3チーム
国際学部 11チーム、アイコン・プロジェクト、ウクライナ募金
教育学部 8チーム

【ポスターセッションの方法】

- ・全発表チームを二つに分けて、最初の30分間、前半のチームが発表する。30分間、何回でも発表する。残りの30分間、後半のチームが発表する。発表を聞く人は、自由に移動して発表を聞く。
- ・オーディエンスは、よかったと思うチームのポスターに「いいねシール」を貼る(一人5枚)。
- ・千葉県パートナーシップのロゴマークの使用許可申請を行って使用許可が下りたので、SDGs集会の参加賞(クリアファイル)にロゴマークを入れた。

【振り返り】

- ・ポスターセッションの会場は熱気にあふれ、感動があったと思う。感動や賑わいは来場者が多かった点にも依存し、来場者の多くは高校生だった。一方で、大学生参加者の多くは発表者であった。授業でSDGsの知見に触れることが多い大学生がもっと多く参加し、発表者への質問を行うことにより、参加者・発表者ともにSDGsへの認識を高めることができる。多くの大学生に参加を仕向けられないか。
- ・発表時間を30分では短いので、40～50分としてはどうか。
- ・通路のパネルは見やすく、窓の高い所にポスターが貼ってあるチームに比べると、発表者とオーディエンスの距離も近くてよかった。ポスターの高さは、オーディエンスの目の高さに合わせたほうがよい。今後、展示件数が多くなった場合、展示場所がいっぱいになってしまうのをどう設計していけばよいか、発表者との距離を縮めるにはどうすればよいか、工夫が必要である。
- ・入口に近い方にオーディエンスが集中してしまった。オーディエンスの偏りを防ぐにはどうしたらよいか工夫が必要である。
- ・事務職員の尽力により、3号館1Fラウンジの椅子・机をパウダールームなどに移し、パネルを並べて展示スペースを設置することができ、大変助かった。

3. 第2回 敬愛SDGs集会 シンポジウムの部

文責：庄司真理子

第2回 SDGs集会は2023年12月16日に開催された。講演会の部では、次のような趣旨のもとにシンポジウム形式で実施した。難民・避難民として日本に来るまでのお話をミャンマーおよびウクライナの現状も含めてお話しいただいた。その後、日本に来てからのお子さんの日本語教育の問題について、小学生のお子さんを持つお母様という立場からお話しいただいた。シンポジウムのテーマ及びご登壇者は下記の通りであった。

また、難民・避難民を研究していらっしゃる研究者、日本語教育の研究者など多彩な顔ぶれで充実した話し合いがなされた。

テーマ：「難民・避難民の現状と子どもたちへの日本語教育」

登壇者：カディザ・ベゴムさん(ロヒンギャ難民)

パンコーヴァ・オルガさん(ウクライナ出身、本学地域連携センター職員)

宮下大夢名城大学准教授(国際政治学・平和研究 NPO法人:さぼうと21)

長谷川頼子本学准教授(日本語教育、日本語学)

なお、シンポジウムの詳細な内容は、次号の本学『総合地域研究所紀要』第15号に掲載予定である。

4. 第2回 敬愛 SDGs集会 ポスターセッションの部

文責: 市川洋子

令和5年12月18日(土) に、本学3号館1階ラウンジにおいてポスターセッションを以下の要領で実施した。また、その成果をまとめた。

【参加チーム】

敬愛学園高等学校／2年生2チーム、3年生2チーム(単独発表)

千葉敬愛短期大学／7チーム、ポスター参加1チーム

敬愛大学／経済学部 4チーム

国際学部 10チーム、ポスター参加4チーム

アイコン・プロジェクト、ウクライナ募金(ポスターのみ)

教育学部 11チーム

【ポスターセッションの方法】

- ・全発表チームを二つに分けて、最初の40分間、前半のチームが発表する。40分間、何回でも発表する。残りの40分間、後半のチームが発表する。発表を聞く人は、自由に移動して発表を聞く。
- ・参加者及び発表者は、すべてのチームの発表終了後、よかったと思うチームのポスターに「いいねシール」を貼った(一人2枚)。その結果をもとに、最優秀賞1チーム、優秀チーム2チームを決め表彰した。閉会式終了後、この3チームにインタビューを行い、その様子は本学 HPに掲載した。
- ・最優秀賞チーム／敬愛学園高等学校2年美浜区5班、テーマ「どうすれば私たちは、美浜区の不便な道をよりバリアフリーにできるのか？」
優秀賞チーム／千葉敬愛短期大学阿部ゼミ、テーマ「共生社会を考え、経験する -障がい者施設の見学と障害を持たれた方との植栽活動をとおして-」
優秀賞チーム／敬愛大学経済学部敬愛大学 piecesチーム、テーマ「核兵器廃絶について」
- ・昨年度同様、千葉県パートナーシップのロゴマークの入ったクリアファイルを参加者・発表者に配布した。

【振り返り】

- ・発表チームが昨年度の倍の40チームとなり、ポスターセッションの会場は大変活気にあふれていた。
- ・今回は土曜日ということもあり、多くの大学生の参加を見込めなかった。
- ・昨年度の振り返りから発表時間を40分とした。
- ・通路のパネルに貼るポスターと窓に貼るポスターの高さを合わせたことで、どの発表も近くで聞くことができた。
- ・同じ学校が隣り合わないようポスターの展示場所を設定したことで、入口に近い方にオーディエンスが集中するといった偏りをかなり解消できた。

- ・昨年度は事務職員の協力で、ポスターセッション会場の設営が大変スムーズであったが、今年度は土曜日ということで、学生数名のお手伝いをお願いした。しかし、圧倒的に人手が足りなかった。今後も土曜日開催になるなら、会場設営に負担がかからないような会場や方法を検討する必要がある。

II 講演会の部

本プロジェクトは、敬愛 SDGs集会のほかに、外部から講師をお招きして、SDGsについて学んだり、本学の FD研修会の場で、本プロジェクトの紹介を行ったりした。その活動記録を以下に記載する。

1. 須藤みゆき氏(ブリタニカ・ジャパン株式会社代表取締役社長) 講演会

文責：市川洋子

本プロジェクトでは、学生や教職員の SDGsに関する知見を広げるために、SDGsに係わる活動をされている外部の方を招聘して講演会を開催してきた。令和5年度は、須藤みゆき氏(株)ブリタニカ・ジャパン代表取締役社長)を招いて、以下の要領で開催した。須藤氏は、幼児玩具のブロックで有名なレゴ社の日本代表として、プログラミング教育の道筋を拓いた方で、現在は経済産業省「未来の教室」プロジェクトにも携わっている。

- ・日 時／令和5年4月27日(木) 13時05分～14時35分
- ・場 所／敬愛大学2号館2202教室
- ・演 題／「SDGsを通して日本の教育のこれまでとこれからを考える」
- ・対象者／敬愛大学教育学部1・2年生130名、他学部学生、教職員

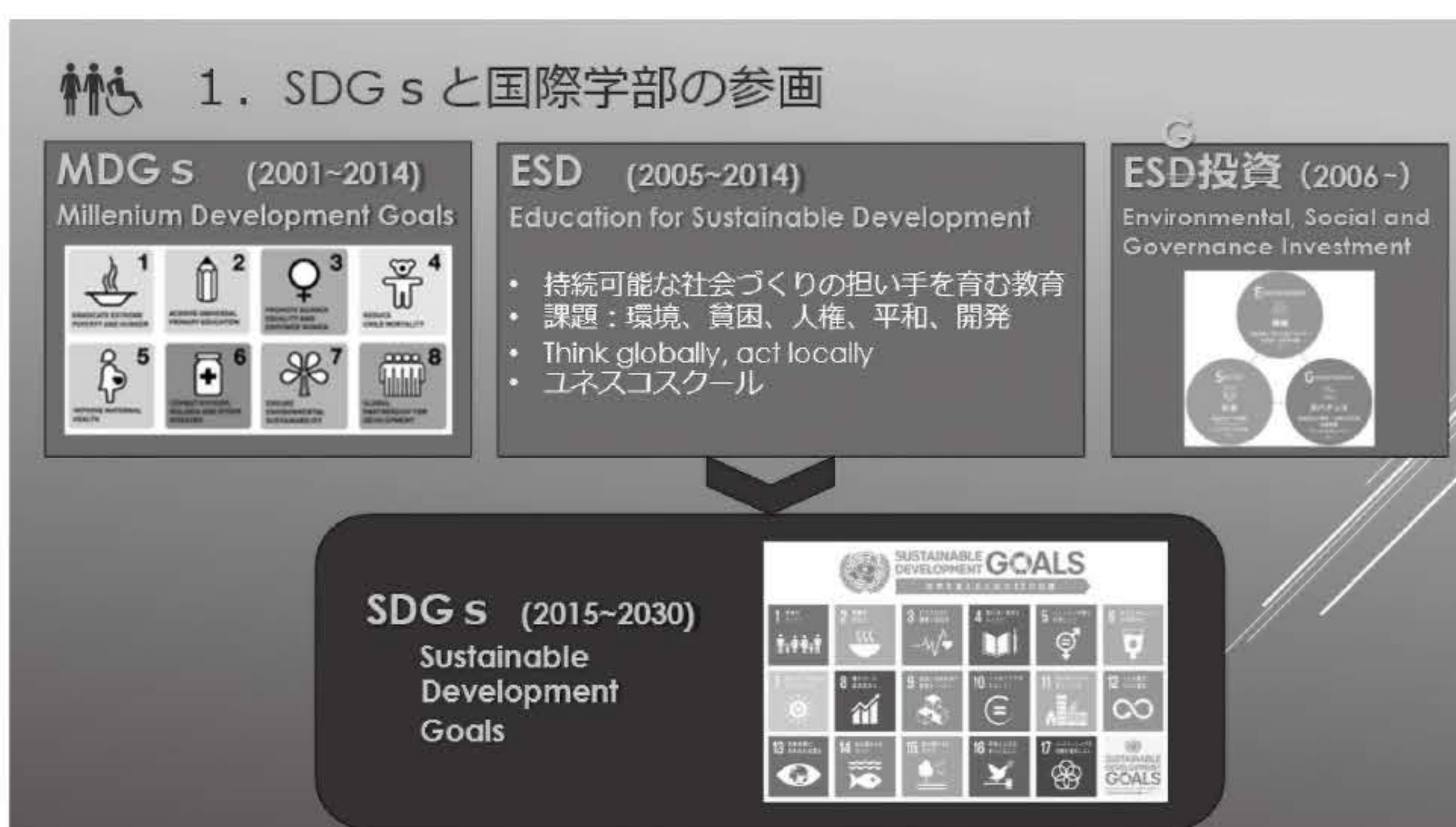
講演の中で特に印象が残っているのは、「10円玉の表裏のデザインを書いてみてください」と問われ、学生たちが悩む場面である。続けて、「どのくらい身のまわりのこと、周囲の人のことが見えていますか？」と学生に問いかけ、SDGsを学ぶ際にまず第一歩としてできることは、自分事として考えることだという話に、多くの学生がうなずいていた。

また、環境省では、ナッジ(nudge: そっと後押しする)などの行動科学の知見を活用してライフスタイルの自発的な変革を創出する新たな政策手法を検証している。ナッジの具体事例を学生に体験させ、SDGsプロジェクトの成果の有効な発信の在り方を話された。これから授業の中でSDGsに取り組む学生にとって、多くの示唆に富む講話だった。詳細は、別稿で報告予定である。

2. 夏の FD研修会「SDG未来プロジェクトについて」

報告者：市川洋子

このプロジェクトは、2021年(令和3年)から学長裁量経費を受けて、代表である国際学部の庄司先生、経済学部の飯野先生、教育学部の市川による共同研究プロジェクトである。令和5年8月の教職員研修で発表する機会を得たので、今年度で3年目ということで、これまでどのようなことを研究・実践してきたか報告



を行った。

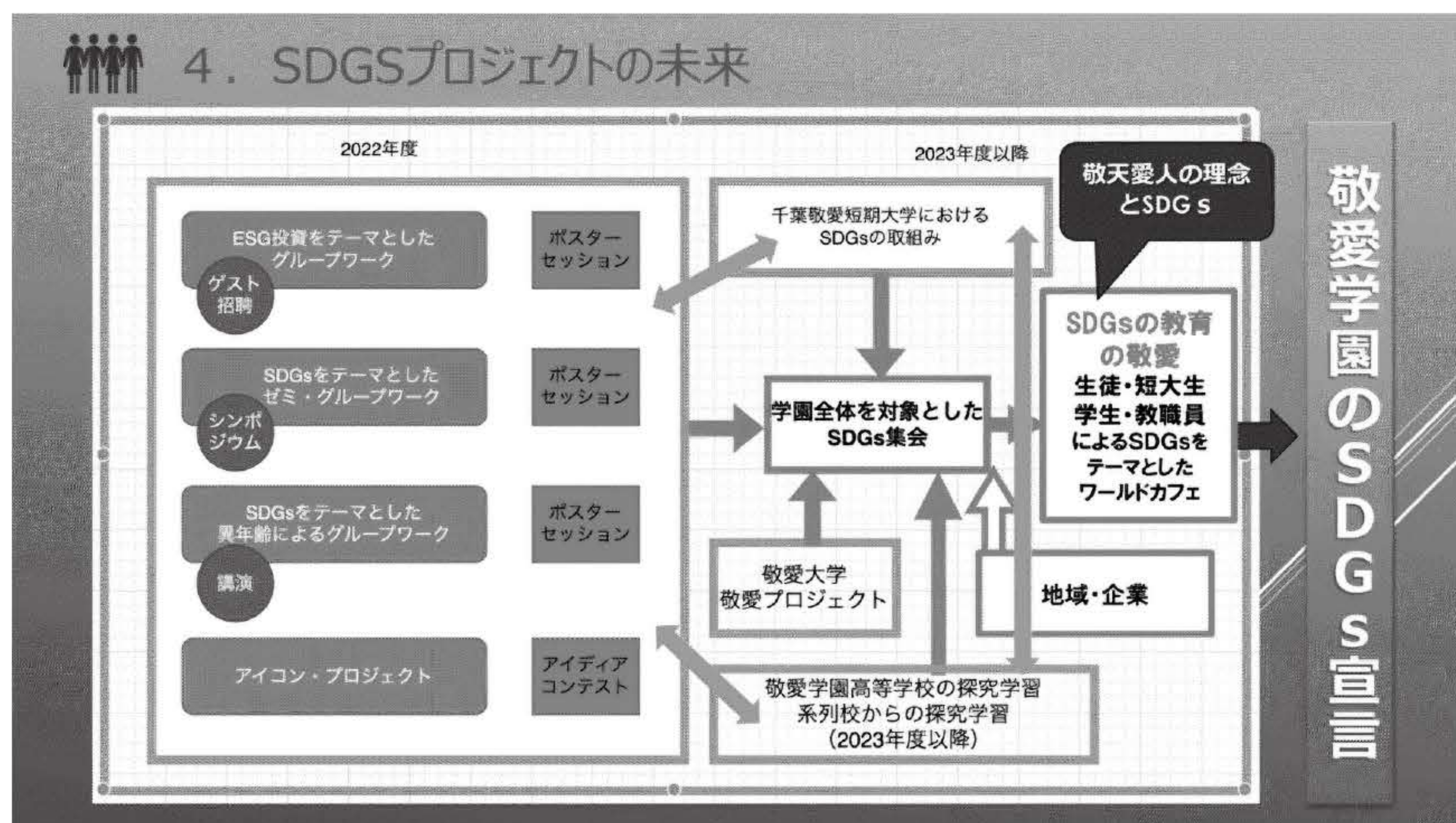
まず、本プロジェクトに先駆けて、本プロジェクトチームの代表である庄司真理子教授（国際学部）が MDGsに注目して2006年から取り組んできた研究や、2018年から3年間取り組んできた総合地域研究所の共同研究プロジェクト（代表：庄司真理子）の内容を紹介した。

次に、2021年からの3年間、学長裁量経費（代表：庄司真理子）を得て取り組んだ SDGs 未来プロジェクトの概要について報告した。

SDGs未来プロジェクトは、これまでの研究で得た知見を踏まえて、大学生にとって実践可能で効果的な SDGs教育のプロトタイプをつくることを目的としている。3学部から教員が1人ずつ担当し、それぞれの学部・学生の特性を勘案して教育実践に取り組んできた。経済学部では、東京証券取引所・日本証券業協会が CSRの枠組みで学校向けに提供している「株式学習ゲーム」をプラットフォームにした SDGs銘柄への投資選択のグループワークである ESG投資ワークショップに取り組んだ。国際学部では、SDGsの視点から自己の目標を設定し、自分の目標をシンボル化するアイコン・プロジェクトを実施した。また、授業の中で SDGsの基本を学び、ウクライナ支援などと結びつけて活動を発展させていった。教育学部では、1年基礎演習Ⅰと2年応用演習Ⅰを合同で展開し、異年齢混合グループ（4人）による Project Based Learningを実施した。SDGsをテーマとし、グループごとに課題を設定し、自分たちでできることを考え、成果をパネルディスカッション方式で発表した。

SDGsへの取り組みを大学のなかだけで終結するのではなく、敬愛学園の生徒・学生の SDGsに対する意識を高めるとともに、各参加校の SDGs教育プログラム改善に資するために、「敬愛 SDGs集会」を実施した。2部構成になっており、第1部は、松浦晃一郎氏（元ユネスコ事務局長）を招聘し、「ユネスコの持続可能な開発教育（ESD）と持続可能な開発目標（SDGs）」をテーマとした講演会を実施した。第2部は、ポスターセッションを実施した。本学3号館1階ラウンジを会場に、敬愛学園高等学校の生徒と本学学生、及び教職員が集い、各グループが持ち時間30分で繰り返し発表した。熱気にあふれ、生徒・学生・教職員が一体となった学びが展開された。

最後に、SDGs未来プロジェクトの今後の展開について提案を行った。各学校における取り組みに協力してもらった地域や地元企業の方にも集会に参加を呼び掛け、連携の輪を広げていきたいと考えている。



3. Zack Tashoff氏講演会¹

文責：庄司真理子

9月26日(火)と9月27日(水)の二回に分けて、本学 SDGs未来プロジェクトの招聘で、ニューヨークのミュージカル・スターZachary Tashoff(ザック)氏の「SDGsとニューヨークのザック」と題する講演を聴いた。ザックは今年6月にニューヨーク州立大学でミュージカルを専攻し、卒業したばかりで学生たちとほぼ同世代の青年である。彼の講演は、すべて英語でなされた。

ザック氏は、自身のボランティア活動を通じてニューヨークのハドソン川の水をきれいにする活動を行ってきた。これは SDGsゴール6「安全な水とトイレを世界中に」と14「海の豊かさを守ろう」を目的とする活動である。ハドソン川は、干潮の時は上流から下流に、そして満潮の時は海の下流から上流に水が逆流する世界でも珍しい川である。その水をきれいにするために大規模なミュージック・フェスティバルを開催し、ザックは子どものころからこの活動に携わってきた。将来はザックもこのフェスティバルに出演するかもしれない。

ザックは、学生たちと同世代のため、友達感覚で話すことができる。先生から学ぶ英語も大切であるが、友達との自由な会話の中から、お勉強としてコチコチに考えていた英語学習の壁をひとつ乗り越えて、先生ではない友達とフラットに会話してみる。これは SDGsゴール10の「人や国の国境を取り除いて、不平等をなくす」こと、そして言葉の壁を友達感覚で乗り越えて、アメリカ人とパートナーシップを組む。すなわち SDGsゴール17にあたる。

講演会では、ザックはご自身のご家族などの自己紹介やハドソン川浄化のお話をしたのち、学生たちと一緒に気楽に会話をした。ニューヨークに友人ができると、学生たちも世界が広がるだろう！！

Ⅲ 海外、国内出張の成果

1. スウェーデンへ出張

市川洋子

令和5年10月7日～15日にイギリスとスウェーデンの学校視察を行った。スウェーデンは環境教育先進国である。そこで、SDGsに関わる教育をどのように行っているかを調査するために、ウプサラ市(スウェーデン)の学校を視察した。

【視察校】

- ・ Malma Skolan(プレスクール、基礎学校1～6年)
- ・ Igelboda Förskolan(1歳児～5歳児)

【視察報告】

①ストックホルムやウプサラの市街地だけでなく、学校にも左右写真のように細かく分別するゴミ箱が設置され、日常生活の中でゴミの分別廃棄が徹底されていた。



②子どもの安全を第一に考え、危険な物を排除するのが日本である。訪問したイーゲルボード幼稚園では、敷地の至る所に岩が飛び出している所がある(次頁上右写真)が、そ

¹「SDGs未来プロジェクト: ニューヨークのミュージカル・スターZachary Tashoff(ザック)氏が来訪」

<https://www.u-keiai.ac.jp/keiai-topics/20230929a/> (アクセス2024年2月12日)から抜粋。

れを取り除くのではなく、子どもたちが活用して活動ができるようにしている。リセロット校長によると、「『子どもが足を折るほど、社会が健康である』と研究でいわれており、体の動かし方を学ぶことはもちろん、体を動かす楽しさ知る必要がある」とのことだった。リスクに対してどう行動すればいいかを子どもたちが学ぶので、擦り傷程度の怪我をした事例は過去に数例あるようだが、大きな事故は起こっていないということだった。自然といかに共生していくのか、考えさせる場面であった。



③SDGsについてテーマ別の絵本が置いてあり、子どもたちが好きな時に読めるようになっていた(下写真)。また、下右写真にある掲示物は高校生が作ったものである。コーナーにあるぬいぐるみはリサイクルの素材から作られている。このように、持続可能な未来を意識して多様なワークが行われている。



④イーゲルボーダ幼稚園では、レッジョ・エミリア・アプローチを取り入れており、大人がいるときは、様々な素材を使って自由に作ることができるアトリエがある。その材料は、店や保護者、保育者から集めたリサイクル品である。

⑤スウェーデンの教育は、インクルーシブ教育である。インクルーシブ教育を如実に物語る場面に出くわした(右写真)。Malma Skolanの算数の授業中の様子である。数人の子どもが、フェルトで作られたスクリーンを置いて問題に取り組んでいる。日本であれば、発達障がいをもつ子どもたちが使うために用意されることになるのだろうが、この学校では、集中したいときにだれでも自由に使うことができる。



それは、「特別支援に関するニーズをもつ児童に対して、絵など各種の情報ソースを活用して児童に情報提供を行っている。ただし、これは当該児童のみに対する支援ではなく、差別や偏見を生まないよう全児童に対する基本姿勢である。実社会に出れば特別支援を必要とする人のために常に特別の部屋が用意されているわけではない。よって様々な情報を自身で統合・整理できるように育てていく必要があり、これが本校の特別支援に関する哲学である。」(長倉守・土田雄一(2023)「北欧教育視察報告書2023」NPO法人日本PBL研究所)というインクルーシブ教育理念によるものである。

2. 広島大学への出張 2024年2月28日～29日

庄司真理子

庄司が「SDGsゴール 16: 公共性と平和を学ぶ会」に出席し、コメンテーターを務める予定である。国連グローバル・コンパクトでは、ビジネスと人権のデュー・ディリジェンス (Due Diligence) が議論されている。その中でも「ビジネスと平和」について、現在、ビジネスの皆様へのチェック・リストを JANIC²と協力して作成中である。これを多くの市民の方に知っていただくことも今回のイベントの趣旨である。

題目: 「ビジネスと平和について学ぶ」

趣旨: ウクライナ戦争、アフガニスタンのタリバンの事例、西アフリカの紛争、ガザをめぐるイスラエル・パレスチナ戦争、ミャンマーの軍事政権とロヒンギャ難民など、世界には紛争が絶えない。これらの紛争を遠い国の出来事として捉えず、自分ごととして考え、学ぶことを目的とする。現在発生している紛争を理解するだけでなく、紛争後の平和構築に展望を持ち、ビジネスが、どのように公共性ある平和な社会を構築するかを学ぶ。

講師 片柳真理(広島大学)「平和構築における信頼醸成に果たすビジネスの役割」

- 1) 信頼醸成措置としてのビジネスとは
- 2) ボスニア・ヘルツェゴビナの実例
- 3) フィリピン・ミンダナオ島の事例

講師 山根達郎(広島大学)

「平和構築におけるビジネス: 国連グローバル・コンパクトとアフリカ」

- 1) 国連における平和構築とビジネス
- 2) グローバル・コンパクトとアフリカの事例

コメンテーター 庄司真理子(敬愛大学教授)

講師紹介

片柳真理: 広島大学大学院人間社会科学研究科国際平和共生プログラム教授。国連PKO、ボスニア・ヘルツェゴビナ上級代表事務所政治顧問の実務経験を持ち、平和構築を研究している。2022年に共著『平和構築と個人の権利—救済の国際法試論』(広島大学出版会)を公刊。

山根達郎: 広島大学大学院人間社会科学研究科国際平和共生プログラム准教授、日本政府国連代表部専門調査員や国際NGO職員等の経歴を持ち、国際関係論の観点から平和と紛争に関する研究をしている。2023年に共著『外交・安全保障政策から読む欧州統合』大阪大学出版会を公刊。

² JANIC(ジャニック)は、NGOの力を最大化することで、世界の社会課題解決の促進を目指す、ネットワークNGOです。<https://www.janic.org/janic/> (2024年2月3日アクセス)

Ⅳ インタビューの結果

1. 藤原帰一氏(東京大学未来研究ビジョンセンター 客員教授・千葉大学国際高等研究基幹特任教授) へのインタビュー

庄司真理子

2023年12月26日、SDGsゴール16「平和と公正をすべての人に」を中心に、この分野の専門としては日本を代表する研究者の藤原帰一氏に昨今のウクライナ情勢について、を中心にインタビューを行った³。

まず国連は国際の平和と安全の維持を主目的とする機構であるが、ウクライナ戦争を止めることができないでいる。国連の正統性(legitimacy)をどのように考えるか尋ねた。その後、同戦争におけるウクライナとロシアについて、どのように考えていらっしゃるか伺った。同氏の論評は数多くのメディアで公表されており、本報告書では著作権の関係もあり多くを言及しないが、ウクライナ戦争について概要として以下のような議論がなされた。

2023年12月現在、ウクライナ戦争は膠着状態である。膠着状態のこの戦争を何年も続けることが本当にできるのか疑問だ。亡くなった兵士の数、使われている兵器の量は膨大であって、このような大規模な損害を受けながら戦争を続けることは、ロシアにとってもウクライナにとっても維持できなくなっていくだろう。レジリエンスという観点からするとウクライナは攻め込まれた側であるから強い。指導者のプーチンが戦争を辞める意思がない。両方がこの先、戦争は勝てると考えている限り戦争は終わらない。この先、今の状況よりももっと戦争継続は難しくなるが、戦争そのものは続いていくだろう。ドイツ、フランスが共同で停戦合意を提案する状況に近づいていると思う。2024年5月に NATOの首脳会議が開かれるため、それに向けて工作が始まるだろう。

2. 田村慶子氏(北九州市立大学教授へのインタビュー)

庄司真理子

2024年1月31日に SDGsゴール5の「ジェンダー平等を実現しよう」というテーマを学生に教える場合に、どのように話したらよいか、ジェンダーと東南アジアの問題の専門家である北九州市立大学の田村慶子教授に「ジェンダーとセクシュアリティをめぐるアジアの政治」というテーマでお話を伺った。まずはジェンダーをいかに定義するか。田村氏によると、ジェンダーとは「生物学的な性のあり方を意味するセックス(sex)に対して、文化的、社会的、心理的な性のあり方を示す」とのことであった。また最近の学生は LGBTI⁴などのトランス・ジェンダーの概念に興味を示すため、これをめぐるセクシュアリティについても詳しくお話を伺った。田村氏によると、欧米のキリスト教的な近代社会は多様で曖昧な性やセクシュアリティを認めなかった。男女を厳格に分け、男性を優位に、女性を劣位とする性別二元のジェンダー規範を確立させた。そして異性愛と生殖を直結させるセクシュアリティ観を国民に押し付けた。欧米の価値観に対してアジアの国々は、比較的同性愛やトランス・ジェンダーに対して比較的寛容であったことを学んだ。特に日本が世界153か国中、ジェンダー指数は125位という非常に男女差別が激しい国であること。他方で水面下では、欧米社会に比べてトランス・ジェンダーを敬遠しない文化であることなどを学んだ。詳しくは、国際関係入門などの授業で反映させていく予定である。

⁴ LGBTQともいう。

3. NRW Japan社長訪問インタビュー

飯野由美子

2/15(木)

NRW Japanは、ドイツ、Düsseldorfに州都を持つノルトライン・ヴェストファレン(NRW) 州の貿易投資振興公社が持つ日本法人で、日本から NRW州への直接投資を中心に日本とのビジネス促進の目的のために置かれている。かつて首都であった Bonnを擁し、人口100万人の Kölnを筆頭に、50万規模の中程度都市が点在し、全体として、日本で言えば首都圏のような様相を呈する。また、かつての鉄鋼・石炭産業の中心地でもあり、千葉市との類似性が見られる。

NRW州も、ドイツ全体のエネルギー転換(Energiewende) の流れの中で、再生可能エネルギー産業の振興を推進している。例えば、NRW Japanのイベントでは「水素」に力点を置いており、この点で日本との関係を深めようとしている。

同社社長 Georg Löer氏との対話の中で、NRW州の中でもとりわけ、再生可能エネルギー教育に力を入れている市の紹介を受けた。コンタクトパーソンの名も挙げられ、2024年度プロジェクトが実現すれば、個々の子供向けから大人向けに至る教育プランを入手できる見込みがある。さらに、千葉市と類似のポジションにある市の組織と連携し、オンラインでつないだ授業ないしイベントの可能性を探ってみる。

V 教育活動の部

1. 2022～23年度 教育学部の教育活動

市川洋子

1年基礎演習Ⅰと2年応用演習Ⅰを合同で展開し、異年齢混合グループ(4人)によるProject Based Learning(PBL)を実施した。SDGsをテーマに、グループごとに課題とゴールを設定し、作成した企画書にもとづいて自分たちのプロジェクトを進めていった。さらに、プロジェクトの成果をポスターセッションという形で発表した。ポスターセッションでは、教育学部3年生の有志が事前に提示されたルーズブリック(1・2年生にもプロジェクトに取り組む前に同じルーズブリックを提示している)をもとに審査を行った。その結果、2022年度は上位8チーム、2023年度は上位11チームが「敬愛 SDGs集会」のポスターセッションの部で発表した。このゼミの導入段階に、令和4年度は、松浦氏(元ユネスコ事務局長)の講話を聴き(Zoom)、SDGsについてのイメージをもつことができた。令和5年度は、須藤氏(株)ブリタニカ・ジャパン代表取締役社長)の講話を聴き、SDGsに関して当事者意識をもつことが大切であることを学んだ。

2. 2022～23年度 経済学部の教育活動

飯野由美子

2022年度から引き続き、「金融事情Ⅱ」5回で ESG投資グループワークを行っている。東京証券取引所からまさに SDGs関連テーマで博士を取得された先生にオンラインで参加して頂き、コメントを加えて頂いている。昨年度うまく行かなかった点を修正し、今年度はほぼ目標とした学習が達成出来た。ただ、学生にとって抽象的な学びになってしまったかも知れないとの反省から、来年度実施(すでにシラバスに記載)の際には、①日常生活で気付いた ESGに関わる諸例やニュース等で知っている企業の実践をまず拾い、肌感覚を持ってから ESG投資活動に入る(説明の際、実感覚を以てわかりやすく話せる)、②ポスターセッ

ESG投資 グループワーク

「金融事情」の授業をベースに
担当：経済学部教員 飯野由美子
(iino@u-keiai.ac.jp)

Contents

- プロジェクトの狙いと効果・課題・対応
- イントロ ーどんな授業？
- 進め方
- 1.step→2.step→3.step
- 4.step→5.最終報告（東証からゲスト・コメンテータ）
- 去年の問題点
- 今年はどう克服したか
- 改善出来るポイント

Background

プロジェクトの狙いと効果・課題・対応

プロジェクトの背景

ESG投資で評価する取り組みの例

項目	内容
環境	・気候変動への対応（温室効果ガスの削減など） ・廃棄物削減（リサイクルや資源の有効利用）
社会	・労働や環境、社会貢献の取り組み ・従業員への教育や研修の提供
企業統治	・透明性の高い財務報告の提供 ・取締役会や監査委員会の設置

2006年国際連合、ESGに配慮した投資を求め「責任投資原則（PRI）」を提唱
気候変動リスク顕在化

企業の長期的利益確保にはESGが欠かせないとの投資家・融資元の認識

投資先企業の環境・社会・企業統治への取組み重視

ESG投資は拡大する傾向

日本経済新聞、2022/5/9

プロジェクトの狙い・課題

- 狙いは、学生のESGに関する認識を高める（ESGと企業利益の関係等について一定の視点を持つなど）
- 投資選択の考え方の応用（前期に一般的な疑似投資→プレゼン経験）
- 課題は、評価機関による「ランキング」に頼ってしまうこと
- 対応：各企業の行動事例を拾ってもらい、それらが、「コア業務とどうかかわるか」等の視点で整理してもらった

Introduction

どんな授業？

- 「金融事情II」の90分授業6回
- 東京証券取引所・証券業協会の「株式学習ゲーム」をプラットフォーム
- ESGの視点でグループワークでポートフォリオ（投資する銘柄のセット）を作る

- 毎回、新しい視点を投げかける
- ポートフォリオ見直し
- 新しい視点から、なぜこの銘柄がいいのかプレゼン繰り返す

- 視点
- 投資先企業はESG情報を定量化して示しているか？
- 投資先企業はESG情報を投資家にアピールできているかの評価
- 評価機関はどう評価しているか？
- 統合報告書をチェックする
- コア業務とどうかかわるか
- 企業の競争力や将来の発展性に結びついているか
- 同業他社と比較してどこが優れているか？
- その他グループの観点

process

進め方

1.STEP
（前週課題を出しておく）→SDGsとは何か、ESG投資とは何かグループワーク→プレゼン

2.STEP
自分の経験、ネットやTVで見た事例→グループで話し合う→どの銘柄を買うかに結びつけていく

- ・どういう視点でESG銘柄を選ぶ？
- ・SDGsをやっていることが、投資家にとって価値があるのか

3.STEP

- ・投資先企業はESG情報を定量化して示しているか？
- ・投資先企業はESG情報を投資家にアピールできているかの評価
- ・評価機関はどう評価しているか？
- ・統合報告書をチェックする

4.STEP

- ・コア業務とどうかかわるか
- ・企業の競争力や将来の発展性に結びついているか
- ・同業他社と比較してどこが優れているか？
- ・その他グループの観点

5.最終報告

東京証券取引所からのゲスト・コメンテータの先生がグループプレゼンを聴いて下さり、①具体的に良かった点を個々指摘して褒めて下さった、②各グループになぜこの銘柄を選んだんか、ポイントをもう一度説明させる→2度目はよりまとまったことが言えていた

improvement

授業の改善

《経験→視点の提供》によって、自分たちで選ぶようになった
→その後、外部評価機関も参考程度

去年は、外部評価機関のランキング上位5社をまんま利用。自分であまり考えずという傾向があった

場所・時間がずれてもグループワークできる
パソコンを使ったりいろいろツールを使った

- ・Google Slideで共同作成→パワポに変換
- ・coggle.it（図解）
- ・Zoomで教室と家の学生が共同作業→共同プレゼン

生成AIを使った

- ・アイデア出し
- ・事例拾い
- ・学生が生成AIの限界を知った

ションへの参加を授業に組み入れる、の2点を修正する。これによって、高校生など初めて ESG投資を知る人にもわかりやすく教えられる能力の獲得→企業に入ってからの実践に使える、ことを目指す。

2023年度の「金融事情Ⅱ」の組立てをプレゼンにまとめたものをここに貼る。これをもって、授業の組立てを知って頂き、これを叩き台に、金融だけでなくキャリアの授業においても、より改善した ESG投資系の授業が可能になることを期待する。

なお、教室でのプレゼンの前には、以下のような項目名(行に列挙)を持つ Excelファイルを用意し、投資先各社(社名を列に列挙) について各項目の説明が出来るかチェックしてもらった。

社名	事例	コア業務とどう関わるか	それを行うことが当該企業の将来の競争力や発展性に結びついているか	同業他社と比較してどこが優れているか	グループの観点
----	----	-------------	----------------------------------	--------------------	---------

このチェックポイントは、昨年度東証の先生によるコメントを受けて、授業の中に定着させた。今年度、この項目を学生が提示するのを見て、評価して下さった。

3. 2022～23年度 国際学部の教育活動

庄司真理子

1) 国際社会にとって SDGsは必要か

庄司ゼミでは、2022年度の2年ゼミ、2023年度の2年ゼミと3年ゼミでは、まず SDGsとは

66

何か、という初歩的な SDGs理解を中心に、教科書の輪読形式で授業をすすめた。教科書としては、南博、稲葉雅紀『SDGs—危機の時代の羅針盤』岩波新書、2020年。および蟹江憲史著『SDGs(持続可能な開発目標)』中公新書、2020年をとりあげ、精読した。その後、「企業は SDGsにどう取り組むべきか」「自治体における SDGsの取り組みと課題」「国際社会全体の目標としての SDGs」という3つのグループに分かれて、敬愛 SDGs集会に向けたポスターの作製に取り組んだ。グループでのディスカッション、ポスターの共同作成、SDGs集会でのグループでの協力しての発表を通して、ゼミのメンバーのコミュニケーションが高まった。

その後、期末レポートは、各自「国際社会にとって SDGsは必要か」とのテーマのもとに個別のテーマでレポートを執筆してもらった。2021年までの学生は、同じ課題を出しても、SDGsの17の目標を羅列して、これを説明するだけのレポートが多かったが、2022年度、23年度の学生たちは、各自の国際社会に対する関心、問題意識を見つめて、これについて論じてくるようになった。

2) アイコン・プロジェクト

アイコン・プロジェクトは、SDGsと敬愛大学が教えるビジョンの有機的連関性を明らかにし、大学のビジョンが身近に感じられるように学生たちのアイデアを募集し、シンプルな言葉、アイコンなどを検討し、大学に提案するというものである。具体的には、①地球全体の目標(SDGs)と学生自身の目標(夢)を、②敬愛学園のビジョン・敬愛大学ビジョン2030・大学のディプロマ・ポリシー(DP)・各学部の DPと連携して、学生自身の目標を再検討するプロジェクトである。

特に1年次基礎演習を中心に、学生たちが描いている自分自身の夢や目標を明確にしてもらうことから始めた。自分が将来どんな人間になりたいか。学生時代に何をしたいか。目標が明確ではない学生がいる。他方で、功利的に考えて自分が目指す特定の職業以外には目もくれない学生もいる。前者のような目標や夢がはっきりしない学生には、自分の夢を描くことを奨励し、後者の近視眼的に他の目標を考えない学生には、視野を広げて自分の目標を捉えなおしてもらうことを本プロジェクトは意図している。

アイコン・プロジェクトを通して、学生たちが将来のビジョンをどのように考えているかある程度輪郭をつかむことができた。彼らの目標を明確化させることが本プロジェクトの目的であったが、むしろ若い彼らが地球の未来をどのように考えているか、教員の側が学ぶ結果ともなった。2022年度の本プロジェクトに提出されたアイコンの絵は、2023年2月8日に開催された第1回敬愛 SDGs集会のポスターセッションで展示された。また2023年12月16日には第2回敬愛 SDGs集会が開催され、ここでも2023年度の1年生が各自のアイコンを披露した。

国際学部の学生は SDGsのゴールの中でも、先にみたようにゴール10「人や国の不平等をなくそう」に関心を持つ人が多い。おそらく経済学部であれば、ゴール8の「働きがいも経済成長も」、教育学部であればゴール4の「質の高い教育をみんなに」がトップに来るの

5 なお、アイコン・プロジェクトの内容の詳細は、庄司真理子著「敬愛大学SDGs未来プロジェクト—2022～2023年の報告書：国際学部アイコン・プロジェクトについて—」『国際研究』第37号2024年3月発行に記載した。本報告は、同論文の抜粋である。また、2023年度後期の国際学部1年ゼミの詳細な分析は、同誌第38号に掲載予定である。

ではないかと推察される。経済学部と教育学部については、現段階では推察の域を出ないため、敬愛 SDGs未来プロジェクトで経済学部と教育学部の協力を得て、より精緻な統計を取ることを検討している⁵。

4. 2022～23年度 ウクライナ共同募金

庄司真理子

2024年1月現在、ウクライナ戦争が勃発してからもうすぐ2年になる。敬愛大学卒業生のパンコーヴァ・オルガさんはお母様とお子さんを連れて2022年3月に日本に避難してきて、現在では敬愛大学の職員として勤務していらっしゃる。敬愛大学の学生たちは、本学の卒業生のオルガさんとその祖国を支援しようということで、ウクライナ支援の学園祭の活動をしたり、共同募金を続けたりした。学生たちは、日本から8000キロ以上離れた遠くの国ウクライナの人たちを支援しようと活動を続けた。遠い国でおこっている戦争を、自分事として考えることは容易ではない。しかし、本学におけるオルガさんの存在、そして学園祭のイベントや共同募金を通じて、彼らは物理的な距離は離れているウクライナの出来事を、自分事として身近に考えることができた。

具体的な活動は、まずウクライナで現在おこっていることを新聞などで調べてレポートすることからはじめた。そして実際にオルガさんにウクライナの現状についてのお話を伺うことによって、さらにウクライナ戦争をしっかりと考えるきっかけとなった。

ウクライナの問題を理解したうえで、学生たちは学園祭でオルガさんやその他のウクライナの方たちとともにウクライナ支援のお店を開いた。お店の名前は、スマチノーホ(СмачноГо)、美味しく召し上がれ、という意味である。お店では、ウクライナ料理、お菓子、そしてウクライナの方たちが作ってくださった綺麗でかわいい小物などが並んだ。オルガさんの小学生の息子さんのジェーニャ君も、かわいいウクライナ支援のブレスレットやネックレスを作って一緒に販売した。お店は大変好評で、「学園祭の一日目だけでなく、二日目も開いて欲しい」などというご意見もいただいた。

もうひとつ学生たちが行った活動は、ウクライナ共同募金である。火曜日と水曜日のお昼休みに学内の数か所に分かれて、ウクライナ支援のための募金活動をした。学生たちにとってお昼休みは貴重な休み時間である。その休み時間を返上して募金箱をもって立つことは、若い学生たちにとっても疲れることだ。一人3回ほど、貴重なお昼休みを返上して募金箱を持って立った。募金活動をしている人を見かけても、知らないふりをして通りすぎる人が多い中、頑張って粘り強く立ち続けた。結果として協力してくださる方が多く、8万円ほどのお金が集まった。このお金をユニセフに寄付した。遠い日本から、私達ができることは少ないが、募金活動を通してウクライナの方たちに思いを寄せる、その気持ちが大切だと感じた。学生の中には、「僕たちすごくないですか？世界を救っているんですよ！！」と歓声をあげている人もいた。

ボランティア活動は、初めて、どうやったらよいかわからない、という学生が多い中、自分が身の回りでできる少しの時間と労力で、この世界の片隅ではあっても、そしてたとえ微力であっても世界を救う活動に携わった経験となった。

共同募金の後は、ウクライナ料理パーティーを開いた。オルガさんのお母様が、ウクライナのボルシチ、サラダなどを料理してくださって、皆で慰労会を開いた。ウクライナ料

理を食べたことがない学生が多い中、はじめてのウクライナ料理を皆で集まって食べる楽しい時間となった。学生たちは料理を作ってくださったオルガさんのお母様タチアナさんに感謝していた。

学生たちの中にはウクライナに深い関心を寄せて、オルガさんが講師を務める本学の生涯学習センターのウクライナ語講座を受講する学生も出てきた。学生たちにとってウクライナはますます身近なものとなってきた。

たとえ遠い国の出来事であったとしても、自分事として思いを寄せることの大切さを学生たちは学んだ。

なお、学生たちのウクライナ支援に関する感想文は、本学国際学部の学生論集『Jump into a New World』第19号2024年3月に掲載した。

おわりに

敬愛 SDGs未来プロジェクトは、学長裁量経費による支援を得て、実現することができた。まずは大学の経済学部、教育学部、国際学部の三学部の協力体制を構築するところから始めた。これが2022年度には、学園高校とも協働して第1回敬愛 SDGs集会を成功させた、2年目の2023年12月には千葉敬愛短期大学も加わり、大学、短大、高校の三つの組織が協力して SDGs集会を成功させた。前半は講演会形式、後半は生徒や学生たちが発表するポスターセッションという形式で進めてきたが、来年度はこの形式も再検討する必要があるだろう。いずれにせよ、敬愛学園内の高校、短大、大学の生徒、学生たちが一堂に会して実施するイベントは、今後も継続することが望まれる。

このようなイベントを実施できた背景には、幾多の研究・教育活動があった。外部講師を招聘しての講演会、担当者の海外・国内の研究調査出張、外部の専門家へのインタビュー、そして各学部の教育活動、ウクライナ共同募金のような課外のボランティア活動など、教育、研究の多方面の活発な活動の積み重ねが、敬愛 SDGs集会へとつながった。本学園の教育にとって、これを後押しする多面的な研究活動が必須であることを、同報告書を通してお伝えしたい。また、これを支援してくれた学園の多くの教職員の皆様、生徒、学生の皆様、そして何よりも学長裁量経費でのサポートをしていただいたことに深く感謝したい。